巻　頭　言

“新しい住宅技術”について

星野昌一

戦後どこの国でも大量の住宅不足に悩まされているが，わが国でもその例にもれず戦災と復員と旧植民地の返還という要素がただでさえ多人口に悩むわが国の都市に重圧されてきたのであるから，いくら勤勉をほこり木と紙で軽便な家をたてることを知つているわが国民にとつてもこれは一大事で，今の調子で進めば全く“さいの河原”のたとえに似て年々建つて行く家と腐朽したりこわされたりする家とほとんどとんとんという状態をつづけなければならない。それは現在の手法では早く建つかわりに家の耐用期間がきわめて短く，10～20 年の間に一応の寿命がきてしまう場所ができるからであつて，その上せつかく多少貯えができた所を震災で火災や家財もろとも一時に大量清算をやられてしまうので全く“100 年河清をまつ”ばかりである。この機会に建てるときに多少不経済のようにみえても恒久性のある耐風，耐震，不燃性のものにきりかえておかないと，“家の蓄積”というものはできない。日本の住宅技術は“器用貧乏”のたとえの通り，手先の器用がわざわいして結局大局からみれば大きな損をしている。たとえば大工という高度な熟練総合技術を若い時からの厳しい訓練で身につけた職人が，思いもよらぬ低賃銀（欧米では木工はレンガ工と共に高級技術者になつている）で市井に溢れて仕事を待つている。それは家を建てるものにとつて一見極めて便利でめぐまれているようであるが，実はそのために住宅技術の向上がはばまれ，ゆきあたりばつたりの現場あわせ主義が往行し，何の計画性も進歩性ものぞめないのである。年々生産量の倍位の速度で用材が切り倒され 20 年をまたずして日本の木材の一大危機が到来するであろう。無定見な現場あわせ主義の技術というものは組織的な裏付がなく，技術の修練向上が単に個人的な蓄積にとどまり，祕伝化した非能率的な方法でしか伝授されない。

このような伝統的なきづなは，なかなか絶ち難いものではあるけれどもこの際思い切つて，新しい基盤に立つ住宅技術に切りかえておかないと，航空機とカゴの競争みたいな結果になることはあきらかである。住宅材料の工業製品への切りかえにもとづく住宅生産の工業的量産，規格化こそ新しい住宅技術のゆくべき途である。

最新の工業技術をとり入れないとただちに落伍する工業化学や航空機工業などにたずさわる人々でも，その住宅は案外 100 年前の住宅技術をあまり出ていない在来の木造住宅の形式であつたりするのは不思議なことで，家を建てる人の頭がその人の若い頃の夢をまだ追つていて，最近の技術と 20 年以上の開きがその間にできていることを専門外のことだと案外見過していることも指摘しておきたい。この意味でこの特集がわが国の住宅技術に何等かの貢献をすれば幸である。

なおこの特集は当生産技術研究所がその第 1 回夏季公開講座として 1952 年 8 月に行つた講義内容をまとめたものである。(1952・9・10)

第 4 巻　　11 月號　目　次　　第 11 号

“新しい住宅技術”特集号

巻頭言

“新しい住宅技術”について……星野　昌一…1

特　集

住宅地の計画……高山　英華…2
気候環境から見た住居と気候制御……渡辺　要…7
住宅と防災……浜田　稔…12
平面構成論……池辺　陽…14
集合住宅の構造計画……坪井　善勝…18
住宅と設備計画……勝田　高司…26
住宅の意匠計画……小坂　秀雄…32
住宅の配色計画……星野　昌一…36
住宅と塗装……浅原　照三…40
住宅とプラスチックス……永井　芳男／星野　昌一…44
住宅と家具……金子徳次郎…50
住宅と庭園……加藤　誠平…53
最近のアメリカ住宅……浜口　隆一…57
生研ニュース・編集後記……60